

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第20集

長土呂遺跡群

SHIMO HIJIRI BATA

下 聖 端 遺 跡 III

長野県佐久市長土呂下聖端遺跡III発掘調査報告書

1993.3

株式会社 信濃住宅
佐久市教育委員会

例 言

- 1 本書は、株式会社信濃住宅による事務所建設に伴う、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 調査委託者 上田市大字中之条1268-57
株式会社 信濃住宅 代表取締役 藤原 秀治
- 3 調査受託者 佐久市大字中込3056
佐久市教育委員会 教育長 大井 季夫
- 4 遺跡名及び発掘調査所在地籍
長土呂遺跡群 下聖端遺跡III
佐久市大字長土呂字下聖端 215-2
- 5 調査期間及び面積
平成4年10月1日～平成5年3月31日
面積 100㎡（試掘調査719㎡）
- 6 本書の編集及び執筆は、三石が行った。
- 7 本書及び出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査に際して、株式会社信濃住宅をはじめ地元の方々には、発掘調査中数々のご協力及びご援助をいただきました。記して感謝の意を表します。

本文目次

例言

第I章 発掘調査の経緯	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌	2
第II章 基本層序	3
第III章 遺構と遺物	5
第1節 竪穴住居址	5
1) 第1号住居址	5
第IV章 調査のまとめ	10
引用参考文献	

挿図目次

第1図 下聖端遺跡IIIの位置	1
第2図 基本層序模式図	3
第3図 下聖端遺跡I・III遺構全体図	4
第4図 第1号住居址実測図	6
第5図 第1号住居址カマド実測図	7
第6図 第1号住居址出土土器実測図	8

第2節 調査体制

教 育 長	大井 季夫
教 育 次 長	奥原 秀雄
埋蔵文化財課長	上原 正秀
管 理 係 長	桜井 牧子
埋蔵文化財係長	草間 芳行
埋蔵文化財係	高村 博文、林 幸彦、三石 宗一、須藤 隆司、 小林 眞寿、羽毛田卓也
調 査 担 当 者	三石 宗一
調 査 員	小林 幸子、宮川百合子 篠崎 清一、山崎 直

第3節 調査日誌

平成4年9月10日

試掘調査を行い、竪穴住居址1棟を確認し、埋め戻しを行う。

10月1日

テント設営・機材の搬入。

重機による表土除去作業、検出作業を行う。

10月2日～10月8日

遺構の掘り下げ、実測、写真撮影を行う。

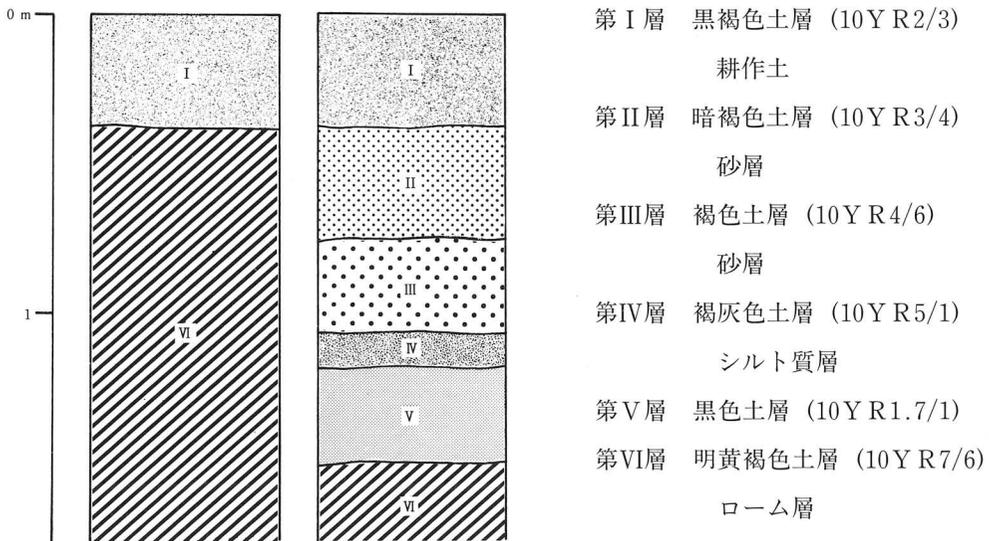
平成5年1月7日～3月31日

報告書作成作業。

第II章 基本層序

長土呂遺跡群は、佐久市の北部、浅間山南麓末端部地域に位置し、標高は705~760m前後を測り、南西に向かって緩やかに傾斜する。この地域は、火山山麓特有な地形“田切り”が非常に発達しており、この田切りに挟まれた台地上に長土呂遺跡群・芝宮遺跡群・周防畑遺跡群等の遺跡群が存在する。田切りの幅は50m前後、台地上との比高差は10~15mを測る。

下聖端遺跡Ⅲは、長土呂遺跡群の中央付近南側縁辺部に位置し、標高は約726mを測る。本遺跡における基本土層は、第Ⅰ層耕作土直下が第Ⅵ層明黄褐色ローム層であるが、西方に隣接する上大林遺跡、下聖端遺跡Ⅰ・Ⅱ、東方に位置する聖原遺跡の発掘調査によって、第Ⅱ層~第Ⅴ層の堆積する小田切り状の低地部分の存在することが確認されている。



第2図 基本層序模式図

第Ⅰ層耕作土は、層厚約30cmを測り、調査区全体にほぼ均一に堆積する。本遺跡内では第Ⅰ層直下が第Ⅵ層明黄褐色ローム層であり、遺構確認面である。第Ⅱ層から第Ⅴ層は本遺跡内においてはみられず、低地部分に堆積するものであり、聖原遺跡においてはこの低地部分を切って遺構が構築される。従って、本遺跡付近の遺構確認面は、大半が第Ⅵ層明黄褐色ローム層であるが、部分的に第Ⅱ・Ⅲ層または第Ⅴ層である。



第3図 下聖端遺跡 I・III遺構全体図

第III章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

1) 第1号住居址

遺構（第4・5図、図版一・二・三・四）

本住居址は、全体層序第VI層上より検出された。他遺構との重複関係はなく、西壁及び南西隅の床面を攪乱によりわずかに破壊される。

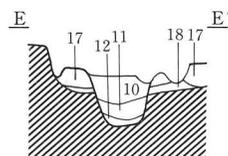
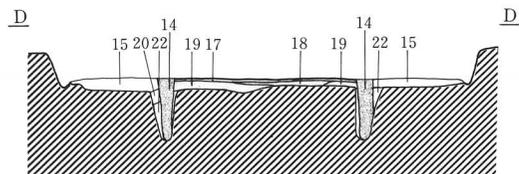
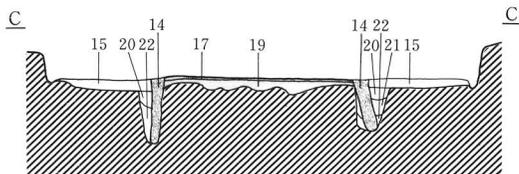
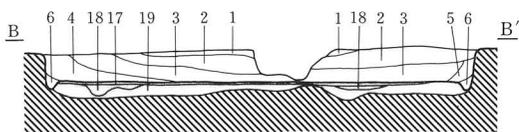
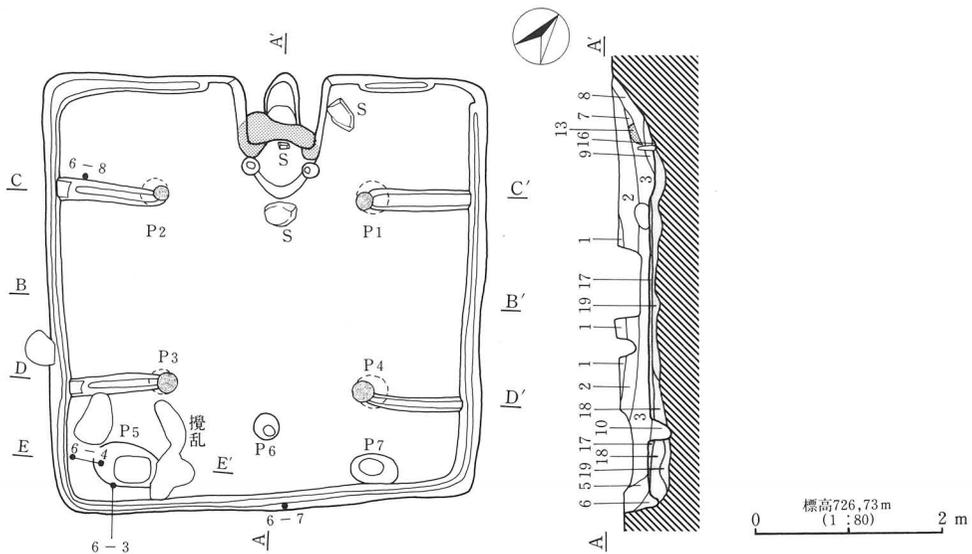
平面形態及び規模は、南北長464cm、東西長468cmを測り、方形を呈する。壁長は北壁長434cm、南壁長408cm、東壁長414cm、西壁長442cmを測り、カマドを主軸とする主軸方位はN-37°-Wを示す。また床面積は18.2㎡を測る。

覆土は9層に分割された。第1層は黒色土層で、中央上面に薄く堆積する。第2層は黒褐色土層、第3層は暗褐色土層であり、第2層・第3層で覆土の大半を占める。第4層・第5層は黒褐色土層で、第4層は西壁下、第5層は東壁・南壁下にみられる。第6層は壁溝内に充填される黒褐色土層で、炭化物を少量含む。第7・8・9層はカマド内にみられる黒褐色土層である。

確認面からの壁高は、21~49cmを測り、急傾斜で立ち上がる。壁体は全体層序第VI層明黄褐色ローム層を利用し、平滑で堅固である。壁溝は北東隅で断絶するもののほぼ全周する。

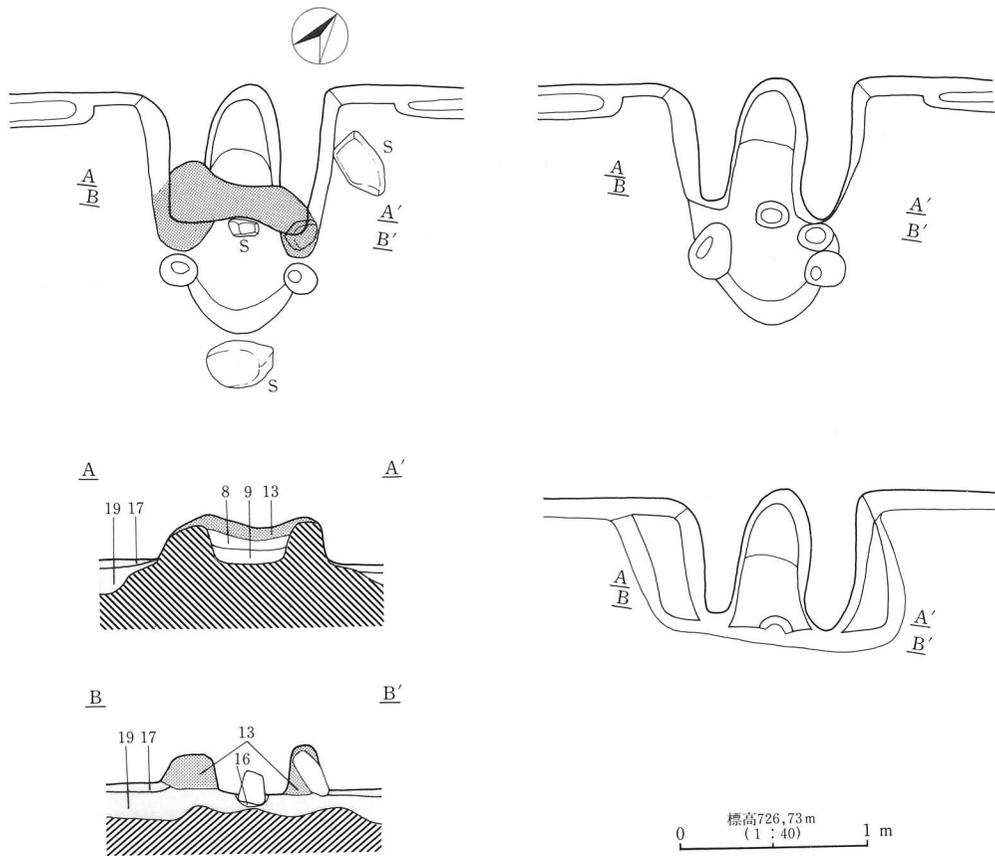
床面は地山を掘り窪めた後、第18・19層を埋め戻し、さらに第17層によって貼り床が施されており、全体に平坦で堅固な状態である。

ピットは総数で6個検出された。主柱穴はP1~P4の4本であり整然と配される。主柱穴の構築は、掘り方の段階で既に位置が決定され、掘り下げが行われる。柱材を埋設した後、第20・21・22層を埋め戻し、その上に貼り床を施して柱材を固定していることから、柱の埋設は床面の構築過程と並行して行われたものと考えられる。従って、床面上においては柱痕が検出されるのみである。柱痕の太さは13~18cmを測る。掘り方の規模は、P1が径35cm、深さ56cm、P2が径26cm、深さ70cm、P3が径24cm、深さ65cm、P4が径28cm、深さ64cmを測り、いずれも円形を呈する。また、各主柱穴から外側に向かって所謂「間仕切り」溝がのびており、壁溝に連結する。長さ100cm前後、幅14~20cm、深さ6~15cmを測り、覆土は炭化物を少量含む暗褐色土層（第15層）一層からなる。P5は南西隅に位置し、貯蔵穴と考えられる。規模は74×44cm、深さ61cm



- 1 黒色土層 (10YR2/1)
ローム粒子。パミス少量含む。
- 2 黒褐色土層 (10YR2/2)
ローム粒子少量含む。5mm以下パミス含む。
- 3 暗褐色土層 (10YR3/3)
5mm以下パミス多量含む。
- 4 黒褐色土層 (10YR2/3)
炭化物少量含む。
- 5 黒褐色土層 (10YR2/2)
ローム粒子・パミス少量含む。
- 6 黒褐色土層 (10YR3/2)
炭化物少量含む。ローム粒子・ロームブロック・
5mm以下パミス含む。
- 7 黒褐色土層 (10YR2/3)
黒褐色粘土主体。
褐灰色(10YR5/1)粘土ブロック少量含む。
- 8 黒褐色土層 (10YR3/2)
炭化物少量含む。粘土ブロック含む。
- 9 黒褐色土層 (7.5YR3/2)
炭化物少量含む。灰多量含む。
- 10 黒褐色土層 (10YR2/3)
パミス少量含む。
- 11 褐色土層 (10YR4/6)
ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 12 黒褐色土層 (10YR2/2)
灰白色粘土ブロック含む。
- 13 黒色土層 (10YR1.7/1)
カマド構築粘土層。
- 14 黒褐色土層 (10YR2/3)
柱痕。
炭化物少量含む。ローム粒子・ロームブロック多量
含む。
- 15 暗褐色土層 (10YR3/4)
- 16 暗褐色土層 (10YR3/3)
- 17 黒褐色土層 (10YR2/3)
- 18 黄褐色土層 (10YR5/6)
- 19 黄褐色土層 (10YR5/6)
- 20 にぶい黄橙色土層 (10YR6/4)
- 21 褐色土層 (10YR4/4)
- 22 黒褐色土層 (10YR2/2)
- 13層粘土ブロック少量含む。
貼床。
ローム主体。黒褐色土(10YR2/3)・黒色土(10YR
1.7/1)ブロック・5mm以下パミス多量含む。
ローム主体。
ローム主体。黒褐色土(10YR2/3)多量含む。
ローム粒子・パミス少量含む。

第4図 第1号住居址実測図



第5図 第1号住居址カマド実測図

を測り、方形に近い楕円形を呈する。覆土は第10・11・12層の三層からなる。P 6 は南壁下中央より58cm内側の床面上より検出され、径28cmの円形を呈する。P 7 は南壁下東側に位置し、52×32cmの楕円形を呈する。覆土はいずれも第10層一層からなる。

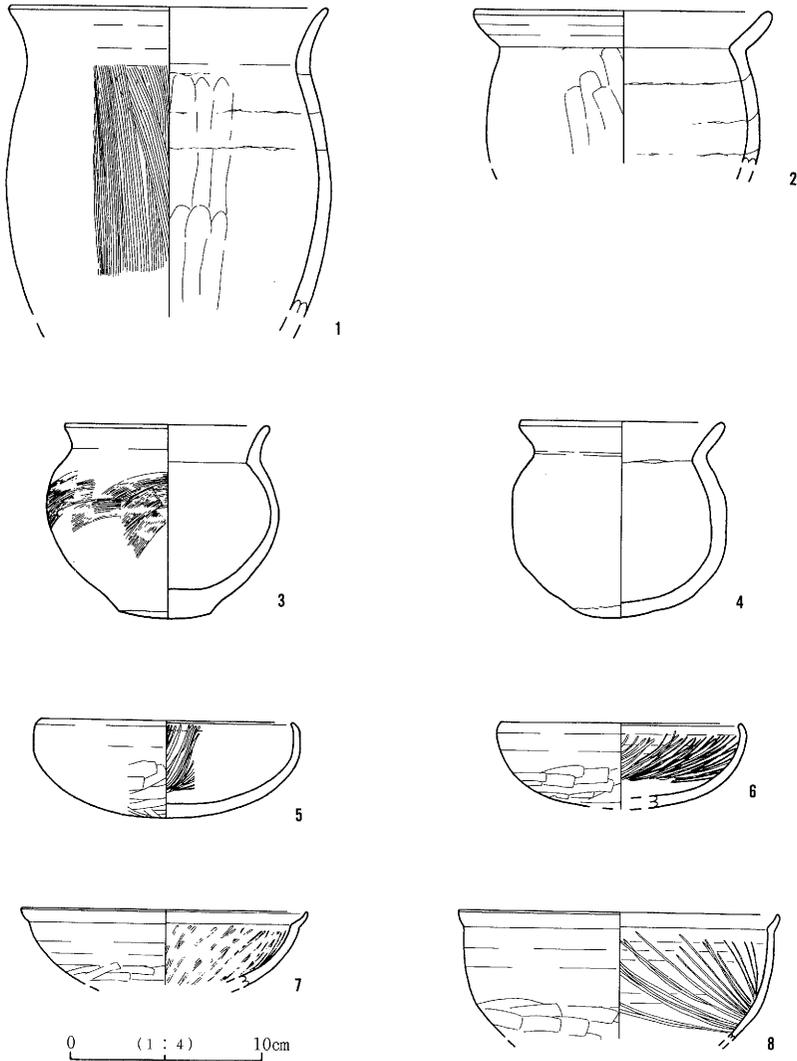
カマドは北壁中央に位置し、焚き口から煙道までの長さ135cm、袖部の幅102cmを測る。カマドの構築状況は、支柱穴と同様に掘り方の段階で位置が決定され、幅約140cm、長さ60～80cmの方形状に地山を掘り残し、その上に袖部を削り出してカマドの基盤が形成される。床を貼った後、袖部先端に礫を埋設し、第13層黒色粘土を被覆してカマドが構築されるが、袖部先端の礫は既に失われており、礫を埋設するための径20cm、深さ10cm前後の掘り込みが検出されたのみである。また、火床部中央に方柱状の安山岩を直立させ支脚石としている。

遺物の出土状況は、特に集中する箇所は認められないが、6-1 はカマドからの出土であり、6-3・6-4 はP5上面から出土している。

遺物（第6図、図版四）

本住居址からは、土師器甕・坏・碗が出土しており、そのうち8点を図示した。

甕には6-1・2と6-3・4の小型甕がある。6-1は、口辺部は緩く外反し、胴部は中位で軽く膨らみ最大径を有する。調整は、頸部から胴下部にかけてハケメ調整が施される。6-2は、口辺部は「く」の字状に短く屈曲して開き、胴部は軽く膨らむ。調整は縦位のヘラケズリがみられるが、全体に摩滅している。6-3・4は小型甕で、口辺部は「く」の字状に短かく開き、胴部は球胴形を呈し、中位に最大径を有する。6-3の底部は肥厚し、中央部でわずかに突出す



第6図 第1号住居址出土土器実測図

第1表 第1号住居址出土土器観察表

挿 番 号	器 種	法 量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
6-1	土師器 甕	(16.8) <21.3> —	口辺部外反する。 胴部は中位で軽く膨らみ、最大径を有する(17.4cm)。	内) 口辺部ヨコナデ。 胴部ナデ。 外) 口辺部ヨコナデ。 胴部ハケメ。	回転実測、口縁部1/4残存。 胎土 白色粒子含む。 色調 5 Y R 4/4 (にぶい赤褐色)
6-2	土師器 甕	15.6 <8.1> —	口辺部「く」の字状に開く。	内) 口辺部ヨコナデ。 胴部ナデ。 外) 口辺部ヨコナデ。 胴部ナデ。	回転実測。 胎土 白色粒子含む。 色調 2.5 Y R 5/4 (にぶい赤褐色)
6-3	土師器 甕	10.6 10.3 4.8	口辺部「く」の字状に短かく開く。 胴部は中位で張り、最大径を有する(12.3cm)。	内) 口辺部ヨコナデ。 胴部ナデ。 外) 口辺部ヨコナデ。 胴上半部ハケメ。	完全実測。 全体に摩滅している。 色調 5 Y R 4/3 (にぶい赤褐色)
6-4	土師器 甕	10.6 10.4 6.2	口辺部「く」の字状に短かく開く。 胴部は球胴形を呈し、中位に最大径を有する(11.3cm)。 底部丸底気味。	内) 口辺部ヨコナデ。 胴部ナデ。 外) 口辺部ヨコナデ。 胴部ナデ。	完全実測。 全体に摩滅している。 色調 10.5 Y R 5/4 (にぶい褐色)
6-5	土師器 坏	(13.2) 5.2 ●	口辺部内湾し、底部丸底。	内) ヨコナデの後、暗文。 外) 口辺部ヨコナデ。 底部ヘラケズリ。	回転実測。 色調7.5 Y R 6/4 (にぶい橙色)
6-6	土師器 坏	(12.8) <4.5> ●	口辺部内湾し、底部丸底。	内) ヨコナデの後、暗文。 外) 口辺部ヨコナデ。 底部ヘラケズリ。	回転実測。 色調 2.5 Y R 5/6 (明赤褐色)
6-7	土師器 坏	(15.0) <4.0> —	口辺部短かく内湾して開き、内稜を有する。	内) ヨコナデの後、暗文。 剝離著しい。 外) 口辺部ヨコナデ。 底部ヘラケズリ。	回転実測、口辺部1/4残存。 胎土 白色粒子少量含む。 色調 5 Y R 5/8 (明赤褐色)
6-8	土師器 埴	(16.8) <6.7> —	口辺部短かく内湾して開き、内稜を有する。	内) ヨコナデの後、暗文。 外) 口辺部ヨコナデ。 底部ヘラケズリ。	回転実測、口辺部1/4残存。 色調 2.5 Y R 5/6 (明赤褐色)

るものの平底を呈するのに対し、6-4の底部は丸底気味で不安定である。全体に摩滅しており、調整は不明瞭であるが、口辺部は内外面ともヨコナデが施され、胴部は6-3にハケメ調整がみられる。坏には6-5・6・7があり、いずれも丸底の底部を有するが、口辺部が内湾する6-5・6と、口辺部が内湾して短かく開き、内稜を有する6-7の二つの形態に分類することができる。調整は、いずれも口辺部の内外面にヨコナデ、底部外面にヘラケズリが施される。また、内面に放射状の暗文が3点ともみられる。埴には6-8がある。口辺部は内湾して短かく開き、内稜を有するもので、6-7を深くした形態をとるものである。調整は、坏6-5・6・7と同様に口辺部の内外面にヨコナデ、底部外面にヘラケズリが施され、さらに内面に放射状の暗文がみられる点も共通している。この他、小片ではあるが、口縁部の直立するものも存在する。また、小片のため図示し得なかったが、高坏の脚部が出土している。

以上の出土遺物から、本住居址は古墳時代中期末から後期前葉に位置づけられる。

第IV章 調査のまとめ

今回、下聖端遺跡Ⅲにおいて検出された遺構・遺物の詳細は前述した。検出された遺構は竪穴住居址1棟であり、出土遺物には土師器がある。

今回行った調査は、調査面積100㎡と極めて小範囲の調査であり、検出された遺構は竪穴住居址1棟のみであったが、床面下の土層断面の調査により、若干ではあるが柱穴およびカマドの構築過程を考察することができた。

主柱穴は、掘り方の段階で既に位置が決定され、掘り下げが行われる。次に柱材を埋設した後、柱材を固定するための埋め土が行われ、さらにその上に貼り床が施される。従って、本住居址における柱の埋設は床面の構築と並行して行われたものであり、貼り床を貼った後に掘り下げを行ったものではないと言えることが出来る。この場合、床面上において検出されるのは柱痕のみである。次にカマドの構築過程であるが、本遺跡の南東に位置し、平成元年度に発掘調査が行われた下聖端遺跡Ⅱにおいて、床面は構築されているが、カマドは方形に掘り残したままの状態で検出された住居址が1棟確認されていることから、掘り方の段階では地山を方形に掘り残したまま、床面を構築した後、袖部の削り出しが行われるものと考えられる。袖部の削り出しが行われた後、袖部の先端に礫を埋設し、両袖石の上に天井石を乗せ、さらに粘土を被覆して構築される。

以上、今回検出された住居址の構築過程について簡単に述べたが、当地域における住居址の分布状況、カマド等付属施設の変遷過程等については、今後の成果に期待したい。

最後に、今回調査を行った竪穴住居址は、株式会社信濃住宅によって保存されることになっており、今後広く活用されることを期待するとともに、調査中ご協力及びご援助を頂いた株式会社信濃住宅に心より感謝を申し上げます。

引用参考文献

- 佐久市教育委員会 1989 『上大林・下聖端遺跡』
- 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1989 『南上中原・南下中原 上聖端』
- 1990 『聖原遺跡Ⅰ』
- 1992 『国道141号線関係遺跡』
- 1992 『聖原遺跡Ⅱ』



1. 第1号住居址(南方より)



2. 第1号住居址(東方より)



1. 第1号住居址カマド(南方より)



2. 第1号住居址カマド(南方より)



3. 第1号住居址カマド(西方より)



4. 第1号住居址カマド(東方より)



5. 第1号住居址カマド(北方より)



6. 第1号住居址遺物出土状況(南方より)



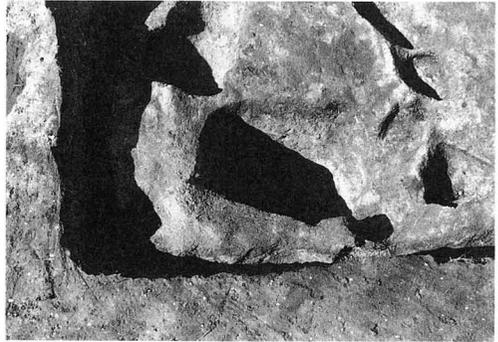
7. 第1号住居址遺物出土状況(東方より)



8. 第1号住居址遺物出土状況(西方より)



1. 第1号住居址P1土層断面(南方より)



2. 第1号住居址P5(南方より)



3. 第1号住居址カマド粘土除去後(南方より)



4. 第1号住居址カマド粘土除去後(南方より)



5. 第1号住居址カマド掘り方(南方より)



6. 第1号住居址カマド掘り方(南方より)



7. 第1号住居址カマド掘り方(東方より)



8. 第1号住居址カマド掘り方(北方より)



1. 第1号住居址カマド貼り床除去後(南方より)

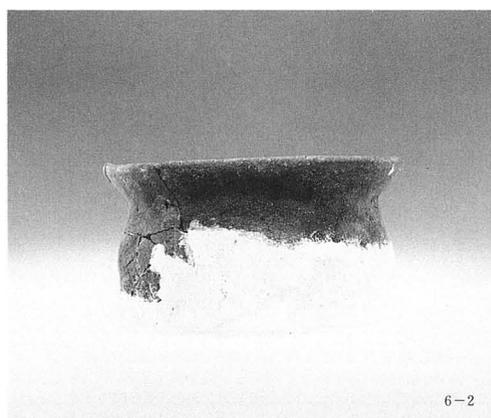


2. 第1号住居址カマド貼り床除去後(南西より)



6-1

3. 第1号住居址出土土器



6-2

4. 第1号住居址出土土器



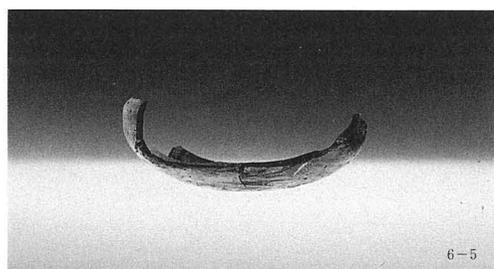
6-3

5. 第1号住居址出土土器



6-4

6. 第1号住居址出土土器



6-5

7. 第1号住居址出土土器

佐久市埋蔵文化財調査報告書	第1集	『金井城跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第2集	『市内遺跡発掘調査報告書1990』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第3集	『石附窯址群III』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第4集	『大ふけ遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第5集	『立科F遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第6集	『上曾根遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第7集	『三貫畑遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第8集	『瀧の下遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第9集	『国道141号線関係遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第10集	『聖原遺跡II』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第11集	『赤座垣外遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第12集	『若宮遺跡II』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第13集	『上山遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第14集	『栗毛坂遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第15集	『野馬久保遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第16集	『石並城跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第17集	『市内遺跡発掘調査報告書1991』(1月～3月)
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第18集	『西曾根遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第19集	『上芝宮遺跡』

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第20集

長土呂遺跡群 下聖端遺跡III

長野県佐久市長土呂下聖端遺跡III発掘調査報告書

1993年3月

編集・発行 佐久市教育委員会

印刷所 株式会社佐久印刷所
